

NPO法人「すまいるHIMEJI」事業に携わって

松田英秀

はじめに

兵庫県西部に位置する姫路市は人口五十四万人程の中核都市です。

平成の市町村合併で人口の割には広域の市となりました。

そんな中で市内にNPO法人が九十程度あり「すまいる」は三十四番目の設立ですので、まあまあ古い方だと思います。私が携わっているのは、知的障害者のための共同生活介護事業「すまいるHIMEJI」と併設事業として、就労継続支援B型事業「いくせいの里」の二箇所です。現在も様々なNPO法人が出来ますが、「すまいる」設立当時はモデルケースになっていました。

NPO法人連絡協議会という組織がありまして、三十程度のNPOが加盟しており、「すまいる」もそこに加盟し、横の連絡を取り合っています。

一、設立の経緯と理由

当法人の設立は平成十九年秋ですが、その母体として平成十一年に開設した知的障害者の為の小規模作業所「いくせいの里」がありました。

これが就労継続B型事業です。そこで運営に携わっていた運営委員会のスタッフが次の理由で共同生活介護事業を立ち上げる事になりました。

- ・ 障害者の高齢化に伴い家庭でのケアが行き届かなくなっている。
- ・ 一人暮らしの者にはホームヘルパーが支援しているが、それも限界に来ている。
- ・ 姫路市周辺においては、障害者が安心して地域で暮らせる共同生活介護施設がない。
- ・ 行政は入所施設を増やさない方針である。

二、法人としての設立の理由

法人として立ち上げた理由として

- ・ 将来を考え、安定した敷設運営にする。
 - ・ 障害者自立支援法に基いた事業にする。
 - ・ 障害者に安定・安心した支援を継続的に行う。
 - ・ 作業所運営の枠を超え、地域の要請に応える事業を行いたい。
 - ・ 地域との交流・理解を深めたい。
 - ・ 事業の拡大を図りたい。
 - ・ 障害者福祉向上に貢献したい。
- 等々がありました。

これらの事業を行うためには法人取得が必要となった次第です。

三、ケアホームでの生活環境

ケアホームでは個別支援計画に基づき、一人ひとりの個性を理解し、今ある能力を伸ばしたり、退行を遅らせたり、生きがいある環境づくりと、周りの人達も心豊かに安心して暮らせるよう、スタッフ全員常に心掛けてサービスを提供しています。

- ・定員が六名
- ・現在入所者は男性四名・女性二名
- ・年齢は三〇代から七〇代まで

介護ヘルパー一名、支援員一名で、朝夕の食事、入浴介助、掃除洗濯、身の周りの世話、健康管理等のお世話を三六五日、一日も休むことなく交代で勤めております。

朝六時起床

六時半 朝食

それぞれの施設や職場へ出勤

夕四時から 各々ホームへ戻る

入浴・夕食・団欒

夜九時 就寝

以上が平日のスケジュールで、土日はヘルパーさんと共に出掛けたり、部屋で好きに過ごしたり、また親元へ戻ったりと、それぞれに過ごします。

その他に地域での清掃活動、年に一度の旅行、忘年会、誕生会、また他の団体と合同で行う催しにも参加します。

四、今一つの就労支援事業

地元の無農薬野菜を作っている農家と契約して、主に草取り、収穫に従事しています。

ケアホームの何人かも、ここで働いており、最大定員一五名受け入れられますが職員六名で対応しており、二つの事業所で十三名のスタッフが従事しています。

報酬を現金でなく、規格に合わず出荷できない野菜で頂き、週一回販売、またラーメン店等店舗に卸したり、残りはケアホームの食材に使っています。

それでも余るので、最近業務用乾燥機を購入、ふりかけに加工しています。

また、今年度からは法律が変わり、より自立を求められる事となり、週に一度スーパーマーケットの軒先を借りて空き缶等の廃品回収を始めました。

五、自分が関わる事になった経緯

私自身は平成十九年ケアホーム開所からの関わりですが、ヘルパーをしている親しい友人から声がかかり、「すまいる」を立ち上げた方々とお会いし、お手伝いする事になりました。それまで介護、支援の経験は無に等しく、自分と夫の両親の介護を短期間経験したに過ぎません。ただ、障害を持つ子供を育ててきたお母さん達の意志の強さ、明るさ、前向きな姿勢に打たれて微力ながらと云う気持ちで手伝う事にしました。先方してみれば何より私が僧侶で

あると云う事が一番安心だった様で、信頼されたと云う事の様でした。女性である事も母性と云う面で良かったのでしよう。公の認可についても身上書の提出等必要ですがその点もスムーズに行きました。最終的には理事長になられたと云う感です。

六、従事して気付いたこと

初めは現場で食事を作る、入浴介助する、洗濯・掃除、宿直と支援の手伝いをしていました。炊事洗濯は日常の事で何をという事はないのですが、障害を持つ利用者との対応は戸惑うことばかりで、まれに暴れる子もいて、正直怖いと思った事もあります。僧侶としての枠を外し、知らない世界に足を踏み入れ、障害を持つ方達と生活を共にして、まさに十界の世界があると体で体験し、実に多くの事を学びました。我々は口で簡単に「菩薩行」と言いますが、実は一般のしかも、ただの主婦が現実の中で無私の「菩薩行」を意識せずに頑張って実践しているのです。

我々は世の中の立っているのだろうか？ 果たして、「菩薩行」なるものを行っているのだろうか？ 深く考えさせられました。

七、僧侶としての立場から

当然のことながら、NPOの中では宗教色は一切出せません。ただ、周りの人達は承知していますので、信頼感は厚いと自負しております。日々、様々な問題が生じますが、なかなか結論が出ない問題も、ある程度私の考えを通してきています。

世俗の判断だけでなく、そこは仏様の目から見た目線があると考え、受け入れてくれているのかなと、受け止めています。宗教色は出せないと言いながらも、ある時、利用者の父親が亡くなった時、請われて導師を引き受けました。

ホームの中では一番重度の障害を持つ青年で、私もいくつも眼鏡等を壊された子でした。

会話も全く出来ない子ですので、当然「死」と云う事を理解出来るとは思えなかったのですが、亡くなられた父親の枕元で静かにジーと座っている姿を見て胸を打たれ周りも涙を誘われておりました。まさに「等しく仏の子」なのだと思致しました。

その後、法事やお盆の度にお参りに来るのですが、日頃は一時もジツとしてられない子なのに、お経の間だけは黙って静かにしているのです。この子の「後生善処」を心から祈らずにはおられない。又、「すまいる」に関わって良かったと喜びを感じる瞬間です。

八、将来の展望

今はホームが出来て丸六年、まだ保護者も余力がありますが、これから高齢となり運営も含めて先の不安は一杯です。予算カットの続く中、公の援助も期待できずと問題は山積みですが、皆で知恵を出し合い将来は建物を増築して老人ホームも併設し、親も同じ空間で住める様にしよう等と夢を見ています。

私達なら「きつと、出来る」と……。

私としては、ホームの行事等の時に地元の青年会が手伝ってくれたりとか、何らかの形で関わりをもってくれよう、声をかけていこうと思ってます。

勿論法服を脱いで行うのが条件ですが「共に寄り添い、共に生きて行く」、お互いに学びあえる、そんな機会になるかと思えます。

終わりに

社会貢献とは言わないまでも「自分で出来る範囲で、出来る事をさせて頂こう」のつもりがいつの間にかやら責任者となり、どっぷりとケアホーム等の事業に関わる事となってしまいました。今は有り難い事、仏様から学びの場を与えて頂いたと感謝しています。自分の信仰の裏付けと自信につながる場を頂いた気持ちです。

皆さんにそんな機会が訪れたら臆せず一歩を踏み出して頂きたい、とお勧めして一尼僧の取り組みを紹介させて頂きました。